
バカとテストと召喚獣～俺と悪友と巧妙な罠～

NYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣〜俺と悪友と巧妙な罫〜

【Nコード】

N8410L

【作者名】

NYO

【あらすじ】

突発的テキスト小説。雄二主人公。

(前書き)

今回の小説。

キャラクター説明をしていませんので、原作を知らない方にはお勧めできません。

主人公は雄二です。

銀色のスプーンに乗ったうまそうな料理が迫ってくる。

「……………雄二、あーん」

「ほら、雄二、ここは男の見せ所だよ！」

「きゃーっ！ 翔子ちゃん大胆です！」

「……………ウチもいつかアキと」

「演技の参考にするのでしょうか」

「……………（パシャパシャパシャパシャ）」

絶対絶命の状況だった。

〈俺と悪友と巧妙な罠〉

p r r r r r

事の始まりは一本の電話だった。

「雄二、世話は翔子ちゃんに頼んでおいたから」

「……………は？」

帰宅途中の俺に不可解な電話がかかってきた。隣にいる明久が不思議そうに俺の顔を覗き込む。

落ち着け俺。ここはとりあえず情報を聞き出すんだ。

「お袋。いきなりなんだ？」

「いやね、町内会でお誘いがあったね。いまから行くことになった

のよ」

「お、おい、ちょっと待て」

非情にも電話からはプープーと音が流れ、電話をかけても一向に出る気配は無い。今は四時であり、出かけるにとしては遅すぎる。どこに行くか聞けなかったのが不安だ。

「どうしたのさ、雄二」

「ああ、すまない」

自然と立ち止まってしまったようだ。いつもは間抜け面の明久も心配した表情をしている。っとそうだ。

「明久、今日家に泊めてくれないか」

「いいけど、なんで？」

今夜はちょっと……帰りたくないんだ。と言いかけて口を閉じた。さすがに明久のような馬鹿な真似はしない。あの時は翔子に酷い目にあつたしな。

「ちょっと親が外出中で、せっかくだから羽を伸ばそうと思ってな」
「今日は姉さんがいないからゲームでもやろうよ！」

そんな他愛もない会話をしながら明久の家に向かう。橙色の太陽の光が少し眩しい。

少し歩くと、明久の家であるマンションについた。
明久は玄関の鍵を開け、「どうぞ」と俺に譲ってくれる。一応”客人”である俺に先を譲ってくれるのだらう。なかなか気がきくやつじゃないか。

「じゃ、お言葉に甘えて」

そんな心遣いを受けて俺は玄関のドアを開け

「…………お帰りなさいませ、旦那様」

すぐに閉じた。

「おい明久、なぜ翔子がここにいる」

「あれっ、霧島さんがもういるの？」

もう？ そんな俺の疑問を他所に、明久は玄関のドアを開ける。

「霧島さん、もう来てたんだね」

「…………夫の帰りを待つのは妻の役目」

「あれ？ でも鍵はどうしたの？」

「……………こんな鍵、容易い」

中から聞こえるはずの無いムツツリー二の声が聞こえてきた。さあ……………逃げるか！

「雄二、どこ行くのさ！」

「離せ明久！ こうならない為に俺は『お前の家に泊める』と言っ
たんだ！！」

くそっ、意外と力が強い。だが負けるわけにはいかない。捕まっ
たら最後。婚姻届に印を押されてしまう。

「ガッ！？」

「…………雄二、逃がさない」

スタンガンだと!?

そのまま明久の家という名の檻にズルズルと引きづられて行った。

「明久、説明してもらおうか」

椅子にロープで縛られ、手足までも縛られた状態で俺は尋ねる。

「何を？」

「なぜ翔子がここにいる！」

「まあ落ち着け、雄二よ、そんなに暴れては危険じゃぞ」

このロープが無かったら今すぐ殴りかかっている所だ。秀吉ひでよしがそんな俺を宥めようとしている。秀吉、可哀想と思うなら俺を逃がしてくれ。

「昼間、霧島さんから『今日、家に泊めて欲しい』って言われたから」

くそつ、俺の行動はお見通しだったということか。だが、ひとつおかしいことがある。

「じゃあ、なんで姫路ひめじたちもいるんだ」

そう、キッチンには姫路と島田しまたもいる。翔子と一緒に今日の夕食を作っている。夕食は外食にでもするか。

「それはじゃな、その現場にワシらもいたからじゃ。ワシはどちらでもよかったのじゃがな」

なるほど、そういうわけか。ムツツリーニの来た理由など聞かなくても解る。甘い臭いが鼻をくすぐる。料理が来る前に縄を解かなければ！

「……できた」

「みなさん、できましたよ」

「アキー、お皿どこにあるのー？」

ムツツリーニと秀吉が料理を持つてくる。皿に盛られた料理はとてもおいしそうで、逆にそれが不安を増した。翔子の料理は、決して口には出さないが、正直うまい。問題は姫路だ。姫路の料理は食った瞬間に意識を失う。その間翔子に何をされるかわかったもんじやない。

「翔子、俺も手伝いたいんだが」

「……今は皆がいるからダメ」

「いったい何がダメなんだ！」

「雄二よ、大人しくしてたほうが懸命じゃ」

馬鹿やろう！このままなら姫路シメの料理を食べることになるんだぞ！！

「……………胃薬なら、万全」

ムツツリーニ。食べた後の安全を確保するよりも、食べないという

選択肢はお前にはなかったのか？

「雄二、暴れるから縄が緩むじゃないか」

バカ！ それはわざとだ。あつ、きつく縛るな！！

「そんな目で『ありがとう』なんて言わなくていいよ」

今ほど馬鹿が憎いと思ったことはない。猿轡はされているわけではないが、口には出さず、恨みがましい目であいつを睨む。そんな視線に気づかずあいつは去っていった。

「……いつか殺す」

どこかからくしゃみが聞こえた。そんな明久と変わるように翔子が近づいてくる。

「……雄二、飲み物は何がいい？」

「コーラ」

「……まだ、赤ちゃん出来てない」

「ちよつと待て、だれが母乳と言った！」

「……冗談」

いや、目が本気だった。

全員が席に着く。席順は明久が上座に座り、左に姫路、翔子、俺。右に島田、秀吉、ムッツリーニ。

「……………いただきます」「……………」

「おい」

「どうしたのよ、坂本」

「なんで俺は縛られたままなんだ！」

夕食の挨拶がされるも、俺の両手両足は縛られたままだった。

犬のように食えと！？

「……………逃げるから」

そういうと翔子はスプーンを手に取る。そのまま近くにあった料理を掬い、

「……………雄二、あーん」

翔子以外が興味津々の目で見てくる。

「ほら、雄二、ここは男の見せ所だよ！」

黙れ明久、てめえは後で殺す、必ず殺す！

「きゃー、翔子ちゃん大胆です！」

姫路、手の間からのチラ見は止める。

「……………ウチもいつかアキと」

島田、その位置で言うと馬鹿あまひなじゃなかったら確実に聞こえると思うぞ。

「演技の参考にするのでしょうか」

秀吉、その、なんだ、じっくり見られるのはさすがに恥ずかしい。

「……………（パシャパシャパシャパシャ）」

フラッシュが眩しい。

口に押し当てられるスプーンを頑なに拒否する。ぐりぐりと押し当てられようが、鼻を指で摘まれようが、決して開けない。翔子は俺をじっと見てくる。俺も負けじと翔子を見つめ返す。

「……………えいつ」

「ぐわあああ！！」

目潰し攻撃。強制的に口を開かされた。口に料理が放り込まれる。ふむ、甘すぎず辛過ぎる味わいが、

「ぐわあああ！！」

二度目の悲鳴が閑静な住宅街に響き渡る。防音完備のマンションでなければ、警察に通報されてもおかしくない。

「しよ、翔子、これは誰が作ったんだ？」

「あ、わたしです坂本君」

やはりか。姫路の料理は外見だけはまともなので判断が付き難い。

「どうですか坂本君？ お口にあっただでしょうか」

「ああ、なかなかいい味だ。ところで姫路、お前は他に何を作ったんだ」

「それとそれです」

指されるのは俺の前にある料理二つ。

キツ（明久、ムツツリーニ、秀吉を睨む俺）

サツ（俺から目をそらす三人）

てめえら、図つたな！

「翔子、俺はお前が作ってくれた料理が食いたい」

「……雄二、とうとうけ『プロポーズではない！』」

「……まだ、け、しか言っていない」

拗ねた翔子もかわ……何を考えているんだ俺は！

翔子は、料理を近くに持ってきて、

「……あーん」

パクッ

こんどは拒まず、普通に食べた。今の俺の顔は、ゆでだこ以上に真っ赤だろつ。だが、姫路の料理を食べるよりかは幾分かましだ。

ああ、これだこれ。如月ハイランドの時に食べた味。幼馴染なだけ

あつて俺の好みを俺以上によく知ってくれている。周りの視線が気になるが、目を閉じてしまえばどうということもない。

……………ゴプッ

「雄二よ！ どうしたのじゃ」

「わ、悪い。少しむせた」

急ぎ机を向いて食べ物を吐く。慌てる秀吉を片手で制し、翔子の方を向く。翔子は俺の吐いたものを布巾で拭いてくれている。申し訳なく思う。

ではなくて

「……………あーん」

「翔子、俺はお前の料理が食べたいんだが」

スプーンの上には再び姫路の料理。

「……………好き嫌いはダメ」

翔子、頼む、それだけは。そんな俺の願い（？）が通じたのか、

「……………お腹一杯なの？」

「そ、そうだ。もう腹一杯でな、食べられないんだ」

「……………残念」

そういつと翔子は俺に食べさせていたスプーンで食事を始めた。間接キスを指摘するのはなんとなく恥ずかしかった。

「明久君、あーんです」
「瑞希^{みずき}抜け駆けは卑怯よ。アキ！あーん」
「ちよっと、どうしたの二人とも、そんなに口に料理を押し付けな
いで、……あー！！！！！！」
「明久、お主の犠牲は無駄にはせん」
「……………（コクコクコク）」
「いい気味だ」
「……………吉井、もてもて」

閑静な住宅街に三度目の悲鳴が響き渡った。

「今日は楽しかったです」
「そうね、坂本のレアな顔も見れたし」
「皆とこんなに騒いだのは久しぶりじゃ」
「……………いい写真がとれた」

時刻は夜。元々、翔子から逃げたい一心で明久の家に泊まろうとした俺。翔子と一緒にならどこにいても関係ないので帰ることにした。

「夜は危ないから送ることにするよ」

明久もこういう所には見所があるんだがな。

「それじゃ姫路さんは僕が、ムツツリーニが秀吉を試してみ、美波！
関節はそつちにはまがらな！」

「ウチもアキに送ってもらつことにするわ」

「……はい」

んで、こういう所には見所が無いと。

「それじゃ雄二、霧島さんのことは任せたよ」

「ああ、それじゃあな。いくぞ翔子」

「……今日は楽しかった」

一足先に退散する。

誰もいない道路を二人で歩く。翔子は俺の少し後ろをついてくる。
吐く息が白い。足音だけが虚しく響き渡る。

「……雄二、手を握りたい」

いままで無口だった翔子の突然の発言。辺りを確認する。誰も居ないことを確認して、後に手を伸ばした。

「……うれしい」

そつと握られる手。この寒空の中、繋いだ手はとても暖かい。惜しむべきは曇り空ということか。隣にいる彼女はこれ以上ない笑顔で、俺に微笑んでくれる。それだけで俺の感情は天気と正反対になった。

暖かい箇所が左手から左腕に広がる。かけられた体重がとても心地よい。この時間が永遠に続けばいいと思う。そんな幸せな気分になる俺。

「……雄二、子供は何人が良い？」

そんな俺を現実に戻したのは、他ならぬ彼女自身だった。

(後書き)

面白かったら光栄です。

雄二はこんな性格じゃねえー！と思った方ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8410/>

バカとテストと召喚獣～俺と悪友と巧妙な罠～

2011年1月14日18時05分発行